

子どもを育む学校・家庭・地域間連携に関する研究(6)

—教師のチームワークが社会的目標構造を介して学級適応感および学級の荒れに及ぼす影響—

○吉田琢哉(岐阜聖徳学園大学)
浅野良輔(久留米大学)
吉田俊和(岐阜聖徳学園大学)

吉澤寛之(岐阜大学)
玉井颯一(高知工科大学)

キーワード: 教師のチームワーク, 社会的目標構造, 学級適応

問題と目的

今日の小中学校の教員は、管理職や同僚との間のみならず、地域住民や保護者との間の協力、すなわちチームワークが求められる。チームワークは組織成員としての適切な対応を促す(Ronfeldt et al, 2015)。教師が地域住民や保護者とのチームワークを効果的に発揮することで、学級レベルでの子どもへの適切な働きかけが促され、その結果、学級全体の学級適応感の促進や学級の荒れの抑止が期待できる。本研究では学級内での教師の働きかけとして社会的目標構造に注目する。社会的目標構造とは学級の中で強調され共有される社会的目標を指し、向社会的目標と規範遵守目標に大別される(大谷ら, 2016)。社会的目標構造は学級水準の概念であり、担任教師が発揮するチームワークが、学級内で共有される社会的目標および学級適応感、学級の荒れに影響すると考えられる。そこで本研究では、マルチレベルモデルに基づき、学級レベルに焦点を当てた検討を行う。向社会的目標構造は学級満足度や社会的コンピテンスへの正の影響が報告されていることから(大谷ら, 2016)、向社会的目標から学級適応感への影響が予測される。他方で、規範遵守目標をはじめとする統制的な関わりには、問題行動の抑止が期待できる(朴ら, 2012; Simons et al., 2005)。よって規範遵守目標から学級の荒れへの影響が予測される。教師のチームワークと学級の荒れは個人レベルに帰属できない変数であるため、学級レベルで概念化し、教師に評定を求める。

方法

対象者 A市内の35の小中学校において、小学6年生と中学3年生および教員を対象に調査を実施した。72学級の小中学生2182名(小学校44学級: 男子652, 女子653, 不明4; 中学校28学級: 男子426, 女子447)および担任教師の回答を分析対象とした。

測定内容 担任教師には(a)(b)について、児童生徒には(c)(d)について尋ねた。(a)教師のチームワーク チーム志向性, チーム・リーダーシップ, チームプロセスからなる吉田ら(2018)の尺度31項目を用いて5件法で尋ねた。(b)学級の荒れ 担当学級について、加藤・大久保(2006)の尺度10項目を用いて4件法で尋ねた。(c)学級の

社会的目標構造 大谷ら(2016)の尺度14項目を用いて4件法で尋ねた。(d)学級適応感 居心地の良さの感覚, 被信頼・受容感, 充実感の3因子からなる江村・大久保(2012)の尺度から12項目を用いて4件法で尋ねた。

分析計画 個人レベルでは向社会的目標構造から学級適応感へのパスを想定した。学級レベルでは教師のチームワークから2つの社会的目標構造および学級適応感と学級の荒れへのパスを想定した。向社会的目標構造から学級適応感, 規範遵守目標から学級の荒れへのパスを想定した。以上のモデルについて、マルチレベル構造方程式モデリングを用いて検討した。

結果と考察

各変数の級内相関係数は.11~.22 ($ps < .001$)であった。マルチレベル構造方程式モデリングによる分析の結果、十分な適合度を示すモデルが得られた(CFI=1.00, TLI=.999, RMSEA=.006, SRMR(within)=.014, SRMR(between)=.049)。教師のチームワークは学級レベルでの2つの目標構造に対して正の影響が見られた。学級適応感および学級の荒れに対しても直接的な影響が見られた。チームワークから社会的目標構造を介した学級適応感および学級の荒れへの間接効果について Sobel の検定を行ったところ、学級適応感に対して有意な効果が認められた($B=0.042, 95\%CI[0.005, 0.080]$)。この結果から、担任教師がチームワークを発揮しているほど学級単位で適切な規範が形成され、子どもが快適に学校生活を送る環境が整うことが伺える。チームワークは学校単位で形成される概念であるため、今後は学校内でのチームワークの形成過程についての検討が望まれる。

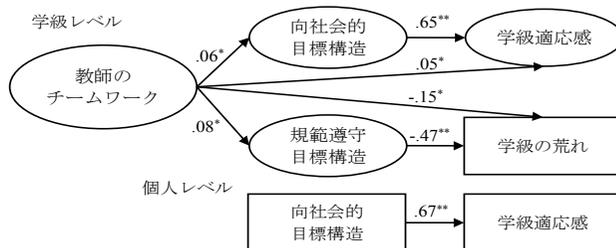


Figure 1 教師チームワークから社会的目標構造と学級適応感および荒れへの影響注)パスの値は非標準化係数を表す。下位尺度と共分散および誤差の表記は省略している。 $*p < .05$ $**p < .01$